

- 化財保護協会 1976) は伊勢湾の影響を重視した、本変遷とは逆に近い変遷を考えられているが、首肯しがたい。
- (42) 27の『馬場川遺跡Ⅲ』に同じ。
- (43) 芋本隆裕・稲山数士「鬼塚遺跡」(『東大阪市遺跡保護調査会年報Ⅰ』東大阪市遺跡保護調査会 1975)
- (44) (1)の小林行雄「西ノ辻遺跡Ⅰ地点の土器」
- (45) 43の芋本・稲山報告。
- (46) 福永信雄・勝田邦夫「上六万寺遺跡」(『東大阪市遺跡保護調査会年報Ⅰ』東大阪市遺跡調査会 1975) 甕Aの垂式の類品と思われるものは片岡遺跡・下繰子遺跡に若干見られる。
- (47) 田辺昭三・加藤修・福岡澄男・松沢修『湖西線関連遺跡発掘調査報告』(滋賀県教育委員会 1973)
- (48) (1)の小林行雄「西ノ辻遺跡Ⅰ地点の土器」
- (49) 円勝寺発掘調査団「円勝寺跡の発掘調査」(『仏教芸術』82)によれば、円勝寺C類は庄内式に相当する。
- (50) 例えば、富波遺跡・高木遺跡・下繰子遺跡・片岡遺跡・坂口遺跡等に見られる受口状口縁甕は、
 ※ ※
 ほとんどが庄内式併行期のものと思われる。
- ※ 近く調査報告書が刊行される予定。
- ※ 林博通、葛野泰樹、宮成良佐『坂口遺跡発掘調査報告書』(滋賀県教育委員会、財団法人滋賀県文化財保護協会 1975)
- (51) 27の安満報告
- (52) 27の安満報告
- (53) (1)の小林行雄「西ノ辻遺跡Ⅰ地点の土器」
- (54) 大阪府立花園高校地歴部『河内古代遺跡の研究』1970)
- (55) (1)の小林行雄「西ノ辻遺跡Ⅰ地点の土器」
- (56) 43の芋本・稲山報告
- (57) 『上小坂・瓜生堂・新家遺跡調査報告書』(東大阪市遺跡保護調査会 1976)
- (58) 26の『馬場川遺跡Ⅲ』
- (59) 46の「上六万寺遺跡」
- (60) 54の『河内古代遺跡の研究』

2 畿内近国における古代末～中世の土器生産について

「Ⅲ」において、近江における黒色土器の系譜について、やや詳しく検討を加えた。そこで、ここでは近江の黒色土器生産の歴史的な位置づけを、畿内近国における瓦器生産との関連で、若干試みておきたい。

さきに述べたとおり、古代末から中世にかけての土器生産は、大量生産・技術の簡素化・規格の統一の方向で進展し、奈良末に発明された黒色土器が、しだいにその占める割合を増大させ、11C前半頃に新しく構築的な窯によって、黒色土器B類が生み出され、ついで、瓦器が成立し、畿内および周辺の日常雑器の主流を点めるとされているのである。しかしながら、近江において(注1)は、瓦器は、いわゆるごく限られた場所で、ごく少数発見されているだけで、依然として黒色土(注2)

器が生産つづけられたのである。

上に述べたように、畿内においては一般に、瓦器の成立とともに黒色土器は、消滅したとされるが、前述の六角堂の例からも知られるように、11C末においても黒色土器A類が依然みられるのであって、必ずしも一率に瓦器への転換がなされなかったことを示している。すなわち、畿内のある地方（おそらく大和か山城と思われる）で、黒色土器工人の一部が、黒色土器B類を、つづいて瓦器を生み出してのちも、一方では黒色土器が生産されていたのであって、近江の場合のように、ついに瓦器の生産技術を生み出さないところもあったのである。

その点で、瓦器生産について、白石氏が指摘されているところは注目されてよい。すなわち、大和興福寺、河内放光寺の瓦窯において、瓦器が焼かれたり、丹波の瓦窯で須恵器とともに瓦器が焼かれている事例を上げ、土師器生産工人が、瓦工人や須恵器工人の協力のもとに瓦器生産をすすめたことを明らかにされたのである。

瓦器生産のあり方については、すでに田中琢氏が、黒色土器の技術を基底とすること、その生産に構造的な窯が必要なこと、製品がきわめて規格性にとみ生産地・流通機構に、画一性のあることを指摘され、白石氏もかつて、11C段階では、大和において集中的に生産され、12C段階で畿内に一団単位の生産・供給圏の出きることを指摘されていた。^(注4)又、最近では、橋本氏が、さらに小単位の供給圏を想定されているのであるが、そのことは同時に、丹波の如き事例や、近江の如き事例とともにこの時期の日常雑器生産の多様性を示すようにも考えられるのである。^(注5)

すなわち、上述したように、瓦器流通の一つの中心である京内にあっても、六角堂例のごとく11C末に下る黒色土器が認められるのであって、黒色土器から瓦器への転換が一率になされたのではなく、丹波のごとき須恵器生産を媒介とするもの、近江のごとく瓦器生産の技術を全く導入し得なかったところもあったのである。瓦器の分布が、一般集落においてもかなりの密度を示すとはいっても、依然として官衙、寺院跡、豪族の居宅などに多いことも、瓦器の生産流通が、大寺院につらなる工人集団、商人層と不可分の関係にあったことをうかがわせるし、構造的な窯が、すでに衰退していた近江のようなところでは、依然、黒色土器が、日常雑器の主流を占めていたのであろう。又、近江の黒色土器が、時代が下るほど、形態・成形手法において、瓦器と区別できなくなるのは、両者における技術的交流の存在を想定させるとともに、古代末から中世にかけての政治的社会的動向を、背後に感じるのである。^(注6)

（大橋信弥）

注

- (1) 田中琢「古代中世における手工業の発達（窯業）―畿内―」（前掲）
- (2) 兼康保明「高島町中ノ坊遺跡出土の瓦器碗」（『滋賀文化財だより』No.5. 1977. 8）
- (3) 白石太郎「瓦器生産に関する二、三の覚え書」（前掲）
- (4) 田中琢、前掲論文・
- (5) 白石太郎「いわゆる瓦器に関する二、三の問題」（前掲）
- (6) 橋本久和「中世日常雑器類の分析」（前掲）

- (7) 白石氏は、瓦器生産の成立に当って、瓦工と土師器工の提携を想定されるが、あくまでその主体は、黒色土器工であったと考える。つまり、瓦器生産は、あくまで須恵器生産の衰退後における、土師器の需要拡大という状況下においてなされた技術革新であって、焼成の大量化・生産品の硬質化という点で、たまたま瓦窯が利用されたのであって、瓦工が主体的に土器生産にのり出したのではないと考える。そして、瓦窯を利用し得た土器工も、おそらく大寺院につらなる工人群であったことは間違いないであろう。

3 む す び

本調査によって、明らかになったのは、おおよそ次の諸点である。

- (1) 本調査区は久野部遺跡の北限、五之里遺跡の東限にあたり、大部分は沼沢地であった。
- (2) 久野部遺跡の北限に当るA区では同遺跡の北に限られると思われる、溝数条および掘立柱建物1棟、土壇若干が検出され、SD2からは弥生後期の良好な一括資料が得られた。
- (3) 五之里遺跡の東限に当るB区からは倉庫様の掘立柱建物1棟、土壇多数と条里に規制された溝2条などが検出され、それらはおおよそ12C以降に一部沼沢地を整地して構築されたものであった。
- (4) 沼沢地は野洲川と家棟川の自然堤防によって形成された後背湿地状のもので、C区で発見されたSD10開口部の土器類によって、7～8C段階まで沼沢地としての機能を果たしたことが知られた。
- (5) B区における沼沢地の埋め立ては、埋土中の遺物によりおおよそ12C以降開始されたごとくであり、文献にみえる「富波庄」の形成史を検討する上で注目される。

(大橋 信弥)